

平成 26 年度 国立中央青少年交流の家
富士のさと ボランティア養成研修

子どもの体験活動を支援するリーダーへ

平成 26 年 7 月 5 日 (土) ~ 7 月 6 日 (日) 1泊2日

○目的

青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

○参加者

自然体験活動・ボランティア活動に興味・関心のある大学生、社会人 計 67 名

○事業の内容

(1)「子供との関わり方～レクリエーションを通して」

担当：事業推進係 望月 奏

はじめにレクリエーションを通して身体と緊張を解しました。自己紹介ゲーム等を通して、はじめて出会う参加者同士も徐々に表情が和らいでいく様子が見受けられました。



(2)「子供たちの“いま”を知ろう」

担当：所長 服部 英二

企画指導専門職 吉野 達也

子供の成長に果たす体験活動の役割や重要性について、今日の子供に見られる課題を交えて講義がありました。また、それらの課題に対応した当交流の家の教育事業についても説明し理解を深めました。



(3)「野炊の王道：カレーライスをつくろう」

担当：企画指導専門職 高島 毅

実際に子供の活動を支援している場面をイメージしながら、安全に野外炊事をするための知識・技能を身につけました。どのグループもおいしいカレーライスを作り、たくさんの笑顔が見られました。



(4)「キャンドルのつどい」

担当：サポートボランティア

参加者は限られた時間の中で各グループの出し物を考え、趣向を凝らした発表をしました。この時間は、サポートボランティアが事業前より熱心に準備を進めていたので、大いに盛り上がりました。



(5)「安全管理と応急処置を学ぼう」

担当：フジ虎ノ門病院 看護部長 渡辺みゆき
主任企画指導専門職 柴田 勝好

体験活動における安全管理についてセーフティトークの場面を想定して、どのようなことに気をつけるべきかを考えました。その後、よくおこる傷病を取り上げ、その対応について実習を通して学びました。



(6)「リーダーの役割と心構えを考えよう」

担当：サポートボランティア

子供と関わる時に大切にしたいことについて活発に意見交換をしました。また、寸劇形式で子供の対応について発表するなど、ユーモアたっぷりの中にもポイントを押さえた学びの時間となりました。



《参加者の感想》

- ・ 「体験を通してわくわくしながら学ぶことがたくさんあった。子供が体験をしたときにも同じような気持ちになるのかなと思いました」
- ・ 「実際に子供と接して活動してみたくなったので、キャンプ参加に向けて日程を調整してみます」

《成果と課題》

- サポートボランティアとして、これまでに子供の体験活動を支援した経験のある者が参加者のメンター的な役割を担い関わることによって、運営がスムーズになるだけでなく、より実践的な学びに深めることができた。
- 修了した参加者の中から10数名が9月に開催される「富士のさと わくわくキャンプ 家族編」の企画運営に携わることを表明し早速段取りについて相談し始めるなど、次の活躍の舞台が待ちきれない程の意欲の高まりが見られた。
- 従来ボランティアを受け入れていた教育事業に留まらず、養成したボランティアが活躍する機会を積極的に創出するとともに、そのスキルなどを一層向上させる機会をコーディネートしていく必要がある。